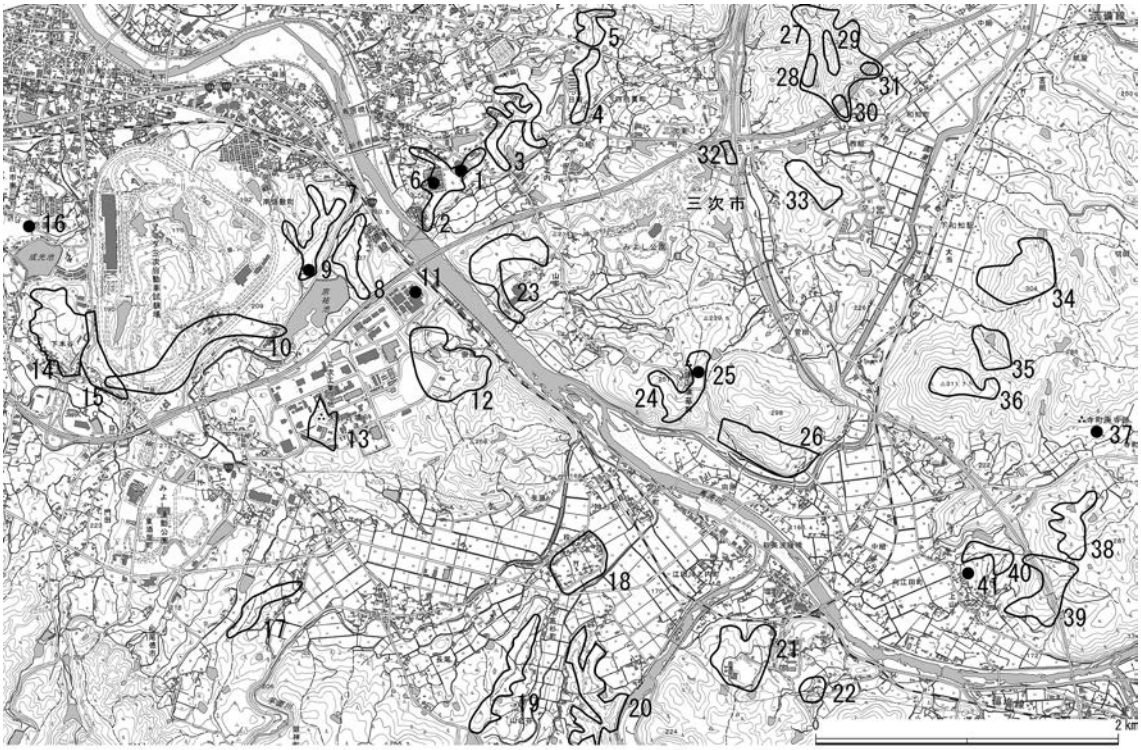
広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室紀要　第９号、2017年、43～68頁。　

四拾貫小原弥生墳丘墓の再評価

今 福 拓 哉

１．はじめに

四拾貫小原弥生墳墓は三次市四拾貫町小原に所在する弥生墳墓である。三次盆地東部の馬洗川北岸に位置し、1968年に松崎寿和氏を団長とする四拾貫小原発掘調査団[(1)] によって発掘調査が実施された。潮見浩氏を中心に『四拾貫小原』（潮見編 1969）として報告が行われており、塩町式土器が出土したことから弥生時代中期後葉を前後する時期に属する墳墓群であることが報告されている。しかしながら、その後の調査事例の増加などにより、近年、貼石を伴う墳丘墓であると認識されつつある。このような状況の中で、広島大学考古学研究室で保管されている四拾貫小原弥生墳墓の出土品及び実測図を確認する機会を頂いた[(2)]。実測図等の再確認を実施した結果、墳丘周辺の外表施設と考えられる礫群の下部に墓壙が掘り込まれている状況が想定でき、複数の埋葬が終了した後に墳丘を構築した配石構造・周溝が伴う墳丘墓であると判断できた。そこで、四拾貫小原弥生墳墓を『墳丘墓』として再評価し、基本的構造について整理するとともに、江の川流域などの周辺類似資料を踏まえた検討を行いたい。



第１図　主要遺跡分布図（S＝1/50,000）

１.四拾貫小原墳丘墓　２.四拾貫小原古墳群　３.四拾貫太郎丸古墳群　４.四拾貫日南古墳群　５.四拾貫向山古墳群　６．下山遺跡
７．宗祐池西古墳群　８．宗祐池東古墳群　９．宗祐池酉遺跡　10．天狗松北古墳群　11．緑岩古墳　12．掛原下古墳群
13．松ヶ迫矢谷遺跡　14．下本谷遺跡　15．下本谷東遺跡　16．花園遺跡　17．廻神山手古噴群　18．高杉城跡　19．高杉古墳群
20．浄楽寺古墳群　21．勇免古墳群　22．塩町遺跡　23．山家古墳群　24．陣山古墳群　25．陣山遺跡　26．大仙大平山遺跡
27．国広山城跡　28．岩倉山城跡　29．龍王山城跡　30．天城山城跡　31．土居跡　32．和知白鳥遺跡　33．南山城跡　34．大鳴古墳群
35．河原田古墳群　36．茶臼山城跡　37．寺町廃寺跡　38．天神古墳群　39．宮の本古墳群　40．岡の段古噴群　41．上山手廃寺跡

２．地理・歴史的環境

（１）地理的環境

四拾貫小原遺跡は、広島県三次市四拾貫町に位置し、馬洗川が可愛川と西城川に合流する三次盆地東端に立地している。盆地北縁から南に張り出した比高50m～60mの丘陵地帯であり、丘陵は馬洗川の北岸まで達する。丘陵東側には丘陵地帯の間に平地が南北に長く分布し、西側は馬洗川に向かって緩やかに傾斜する微丘陵となっている。

（２）歴史的環境（第１図）

三次市は山陽地方と山陰地方のほぼ中間に位置し、古代から交通などの内陸の中核都市として発展しており、旧石器時代から近世・近代に至る各時代の遺跡が数多く確認されている。特に当該遺跡が所在する周辺は先述したような地理的特性上、遺跡が密集する地域であり、数多くの古墳等が所在している。以下、当該地域を中心に遺跡を概観する。

旧石器時代　下本谷遺跡（西酒屋町・14）、段遺跡（四拾貫町）、和知白鳥遺跡（和知町・32）ではナイフ形石器や鋸歯縁状石器、掻器、スクレイパー、局部磨製石斧、台形様石器などが出土している。いずれも姶良Tn火山灰（AT）の降灰に先行する時期のものであり、後期旧石器時代初頭に遡る可能性が指摘されている。この他、下山遺跡（四拾貫町・６）や塩町遺跡（大田幸町・22）でも旧石器時代の文化層が確認されており、周辺ではさらに多くの旧石器時代の遺跡が認められる。

縄文時代　縄文時代の遺跡としては、松ケ迫B地点遺跡（東酒屋町）で縄文早期の小型竪穴式住居跡が検出されている。下本谷遺跡で楕円押型文土器、元国遺跡（粟屋町）では後期の土器・石器が出土している。

弥生時代　集落および墳墓ともに多くの遺跡が確認されている。高蜂遺跡（南畑敷町）では突帯文土器・遠賀川式土器が出土しており、縄文晩期から弥生前期にかけての集落跡が確認されている。高平遺跡（十日市南）では中期の竪穴式住居跡が検出され、鍛冶作業が行われていたことが推測されている。また、塩町遺跡では竪穴式住居跡から加飾性のある土器が一括出土しており、「塩町式土器」として弥生時代中期後葉の指標土器に位置づけられている。以上のように、三次地域では中期以降、集落遺跡が増加し、当該地域の発達段階を示すものと考えられる。

また、前期の墳墓は標石墓（覆石墓）である高平A号墓（十日市南）、松ケ迫矢谷遺跡（東酒屋町・13）などに限られるものの、その特異性は特筆できる。中期後葉頃になると、陣山墳墓群（向江田町・25）、宗祐池西１・２号墓（南畑敷町・９）、殿山38・39号（大田幸町）など、四隅突出型墳丘墓を含む墳墓群が出現するほか、四拾貫小原遺跡（四拾貫町・1）では、本稿で示すように初源的な形態を持つと考えられる方形貼石墓が認められ、墳丘墓が中国地方山間部の中でも当該地域において先行的に発達していたことを想定できる。後期になると、花園遺跡（十日市南・16）では墳丘墓と溝により区画された墓域が確認されており、被葬者間における格差の顕在化が指摘できる。また、特殊器台・壺が出土した前方後方形の墳丘をもつ矢谷MD１号墓（矢谷古墳・13）や岩脇遺跡（粟屋町）では四隅突出型墳丘墓という在

地的な墳形選択を踏襲するものの、吉備地域や山陰地方の影響を受ける遺物が出現しており、地域間交流を検討するための資料が蓄積されている。

古墳時代　遺跡数が増加し、古墳は約4,000基が確認されている。古墳の出現については不明瞭であるものの、前方後円墳の若宮古墳（十日市南）や大型円墳の岩脇古墳などが前期に遡る可能性がある。中期については、４世紀末から５世紀初頭において下山手第５号墳（向江田町）や大仙大平山第21号墳（向江田町・26）、畿内的な様相が指摘される宮の本第24号墳（向江田町・39）などが築造される。５世紀代には築造数が増加し、下山手第４号墳、四拾貫８・９号墳（四拾貫町）などの小型古墳が築造される。また、大型円墳である浄楽寺第12号墳（高杉町・20）など、大型古墳を含む古墳群が認められ、浄楽寺古墳群、七ツ塚古墳群、四拾貫古墳群（四拾貫町・２～５）などが形成される。この他にも、糸井大塚古墳（糸井町）や酒屋大塚古墳（西酒屋町）といった帆立貝形古墳が築造される。後期には勇免古墳群（大田幸町・21）などで小型前方後円墳が築造されるほか、上四拾貫古墳群（四拾貫町）などの竪穴系の埋葬施設を持つ古墳が残るとともに、横穴系の埋葬施設を持つ古墳も出現する。横穴式石室を持つ古墳としては、６世紀前半の若屋第９号古墳（粟屋町）が最も古く、６世紀後半以降増加する。終末期の古墳については、７世紀中頃に築造された柄香炉形土製品が出土した門田敦盛第４号墳（東酒屋町）などが確認されている。

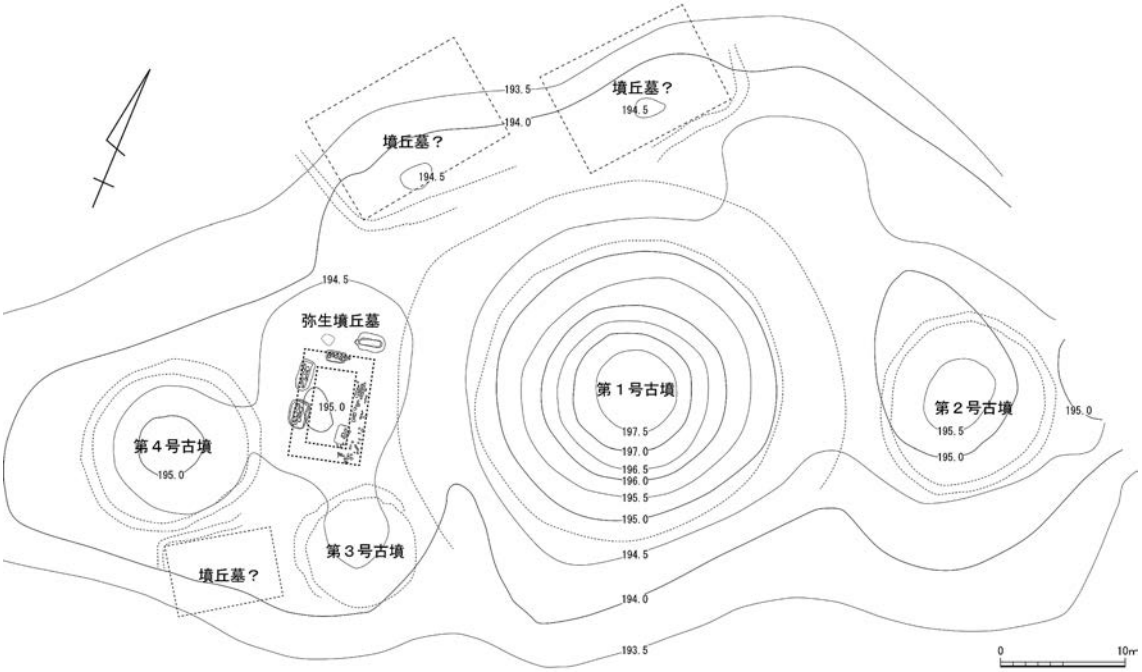
古　代　官衙・寺院跡などがあり、郡衙と推定される下本谷遺跡、三谷寺に比定される７世紀後半創建の寺町廃寺跡（向江田町・37）、７世紀末頃創建の上山手廃寺跡（向江田町・41）などがある。また、寺町廃寺跡に瓦を供給したとされる大当窯跡（和知町）なども確認されている。

３.『四拾貫小原』（潮見編 1969）の概要

1968年10月、国道183号線の南側に位置する四拾貫小原古墳群の所在する丘陵地帯に三次電機株式会社（現ミヨシ電子）を建設するため、三次市土地開発公社による土地造成を契機として調査が実施された。発掘調査は1968年10月25日から11月18日まで実施しており、調査前測量を行い、これをもとに９ヶ所にトレンチを設定した。その結果、７基の土壙墓からなる弥生時代の墳墓、４基の古墳、方形区画とこれに付随する土坑や方形区画溝などが検出された[(3)]（第２図）。

（１）弥生時代墳墓（第３図）

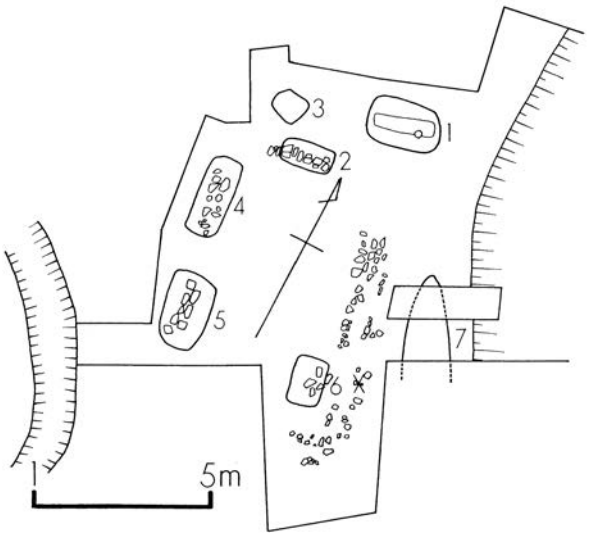
墓域・外表施設　第１号墳南西部のわずかな高みに７基の埋葬施設を検出し、土壙墓群として報告されている[(4)]。墓域東側では30～40cm 前後の河原石が長さ７m、幅0.5～1.0m にわたって直線状に分布しており、石群として認識されている。表土直下にあり、１号墳寄りで直線状に並び、東端のものは扁平な石を立て並べている状況が指摘されている。石群の性格としては、標石として機能していたとしながら、土器の出土や周辺の周溝から土器が出土していることから共献土器類を据えた場所と理解し、一種の祭祀の場所としている。また、土壙上部の石群についても標石と判断し、いずれも地表面に露出していたものと報告がなされ



第２図　四拾貫小原遺跡検出遺構（S＝1/600）

ている。

埋葬施設　同程度の規模である土壙墓を７基確認しており、すべて基盤である赤褐色粘土層から掘り込まれるが、埋葬施設については不明瞭である。また、第１号墓は２段墓壙を呈しており、1967年調査の古墳群検出墓壙と類似していることから弥生時代後期から古墳時代に属すると判断している[(5)]。

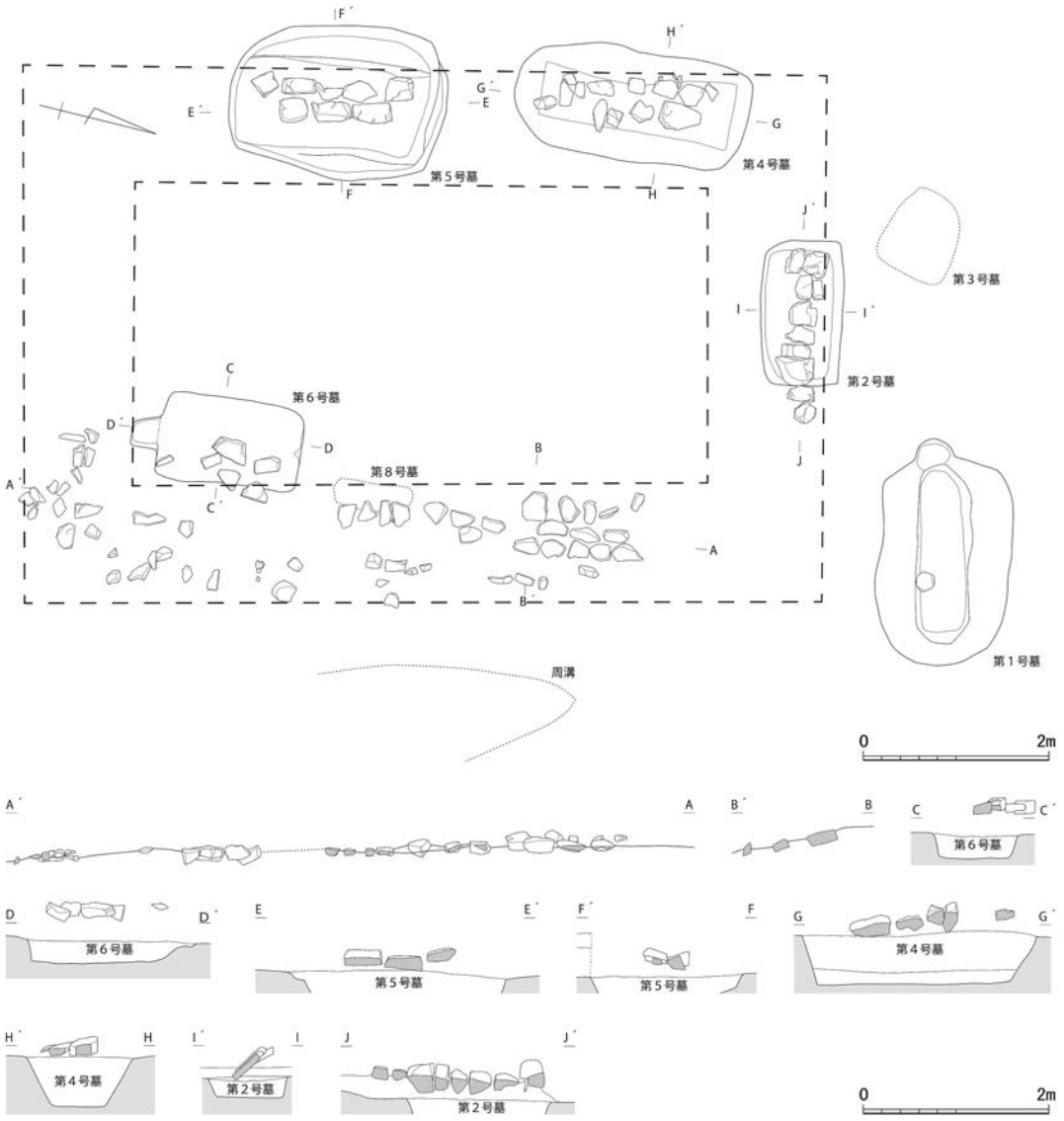


第３図　弥生時代墳墓関連遺構配置図（潮見編 1969）

４．墳丘規模と土層堆積状況

（１）墳丘規模

四拾貫小原弥生墳墓は再検討の結果、弥生時代中期後葉に築造され、墳丘裾間の復元長が約8.5m、復元幅約5.7mとなる方形貼石墓であることが想定できる（第４図）。墳丘斜面及び墳頂部に施された外表施設（貼石・標石）から、墳丘高は約0.3mと推測でき、低墳丘墓であったとみられる[(6)]。墳丘頂部平坦面についても、外表施設から復元長が約6.1m、復元幅が約3.2mであったことが推測できる。墳丘斜面には残存状況が悪いものの、河原石を中心として列石を伴う貼石が３段程度貼られていたと想定できる。墳丘頂部平坦部も同様に、墓壙上部で標石が施されている状況が確認できる。また、墓壙が墳丘斜面下部に位置するものについても上部で石が貼られていることが明瞭であり、標石が墳丘斜面の貼石として機能していた可能性も指摘できる。墳丘隅部については貼石の残存状況が悪く、その形態については判断で



第４図　四拾貫小原弥生墳丘墓復元図（S＝1/80）

きなかった。しかしながら、墳丘北西部に残存する第２号墓及び第４号墓の墓壙上面の貼石が北西隅角に向かって若干ながら湾曲している状況も認められ、隅部が突出する四隅突出型墳丘墓であった可能性もある[7]。

（２）土層堆積状況

墳丘基盤　検出された墓壙はすべて赤褐色粘土層から掘り込まれていることを確認した。赤褐色粘土層は基盤層であり、この上層は貼石・標石を検出した黒ボク土層となり、旧表土層は認められない。このことから、被葬者の埋葬に際してある程度水平な面を形成するために地表面を削り出したものと判断できる。したがって、墳丘構築当初の作業面として機能したとも考えられる。

墓壙埋土　墓壙内部については、基盤層である赤褐色粘土層と黒ボク土層が混在して堆積しており、墓壙掘り込みのための作業面及び墓壙掘削時の土を被葬者の埋葬終了後に木棺裏込

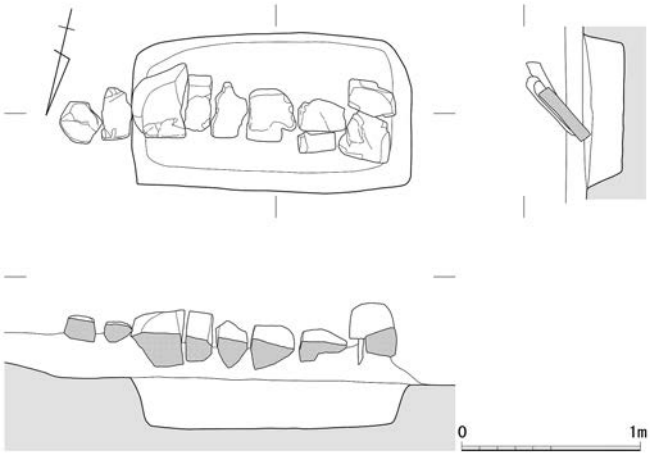
め土及び墓壙埋土として利用したものと判断できる。また、第５号墓上面において、黒色土と黄褐色土が墓壙を覆うように楕円形プランで堆積している状況が認められた。埋葬施設を覆う封土として機能したものと推測できる[8]。なお、検出した墓壙すべてで木棺痕跡が明瞭には確認できていないものの、墓壙掘り込み面で内部腐朽による黒ボク土の落ち込みが第６号墓で確認されている。埋葬施設が木棺墓であった可能性が考えられる。

墳丘盛土　墳丘基盤層上面に黒ボク土層が堆積しており、墳丘斜面の貼石及び標石、墳丘頂部平坦面で検出した標石はすべて黒ボク土層上面で確認されている。このことから、黒ボク土層は墳丘盛土層であると判断した。

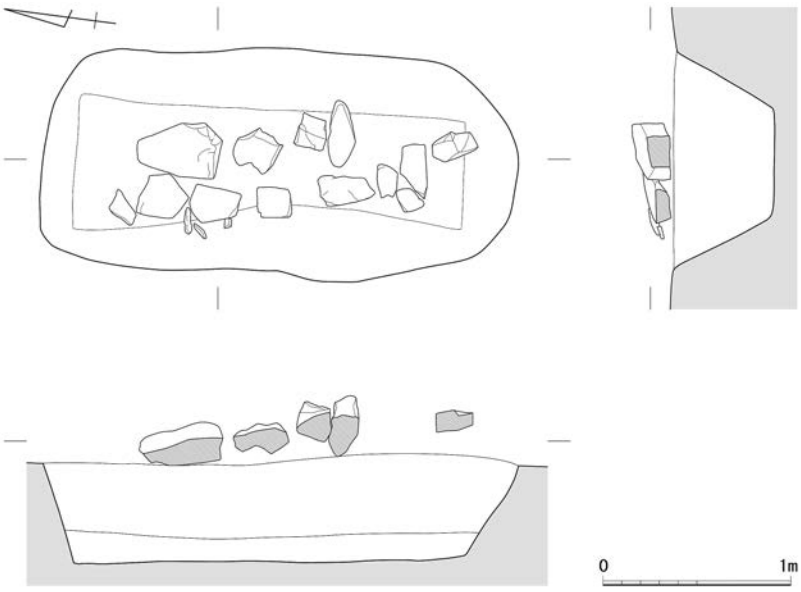
５．検出遺構

（１）弥生墳丘墓埋葬施設

第２号墓（第５図）　第２号墓は墳丘北側斜面中央付近の直下で検出した。墳丘東西軸に平行して墓壙が掘り込まれており、墓壙北側は墳丘裾より北側から掘り込まれている。墓壙上面の検出規模は全長1.56m、最大幅0.89mとなり、胴張り気味の長方形プランを呈する。墓壙底の規模は全長1.36m、最大幅0.72mとなり、深さは0.29mとなる。墓壙内からは遺物は出土せず、木棺等の埋葬施設の痕跡も不明瞭である。なお、墓壙直上では主軸に沿って花崗岩が墳丘盛土に貼り付いており、墳丘頂部平坦面に向かって30°～45°の角度を呈している。ただし、墓壙東側で検出した礫については角度を持たず、ほ



第５図　第２号墓平面図・断面図

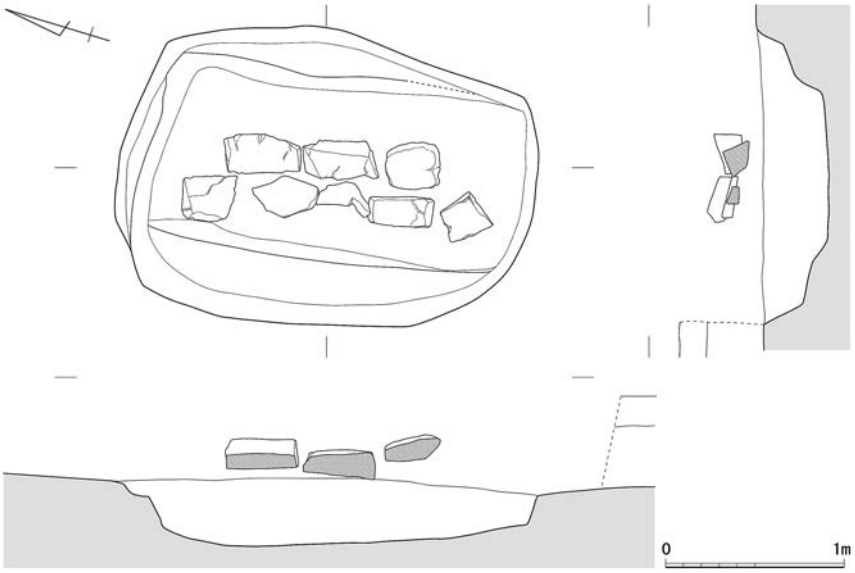


第６図　第４号墓平面図・断面図

ぼ水平に据えられていた状況が認められる。

第４号墓（第６図）

第４号墓は墳丘西側斜面の北西隅部付近直下で検出した。墳丘主軸に対し概ね平行して墓壙が掘り込まれており、墓壙西側は墳丘裾部より外方に位置する。墓壙上面の検出規模は全長2.52m、最大幅1.25mとなり、隅丸長方形のプランを呈する。墓壙底の規模は全長2.05m、最大幅0.71mとなり、深さは0.52mとなる。墓壙底面は四隅が明確であり長方形に近いが西側中央付近でくびれており、不整形な形状となっている。墓壙内部には赤褐色粘土と黒ボク土が混在して堆積しており、木棺などの埋葬施設の痕跡は明瞭には確認できていないが、底面の形状から木棺墓であった可能性もある。墓壙直上の礫群は墳丘頂部平坦面にむかって傾斜を持ち、第２号墓同様に墳丘盛土に貼り付いている状況が認められる。



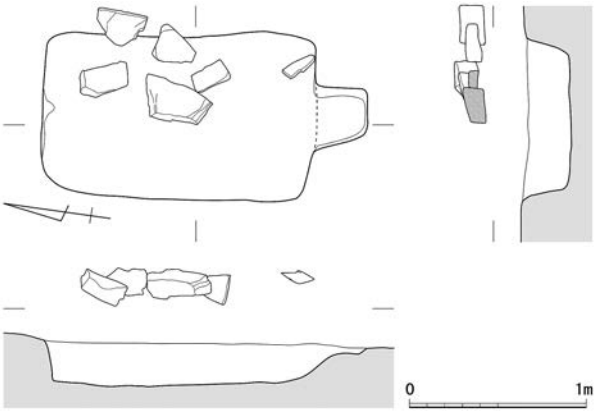
第７図　第５号墓平面図・断面図

第５号墓（第７図）　第５号墓は墳丘西側斜面の中央から南側付近直下で検出した。墳丘主軸に対し概ね平行して墓壙が掘り込まれており、墓壙西側は墳丘裾部より外方に位置する。墓壙上面の検出規模は全長2.32m、最大幅1.65mとなり、隅丸長方形のプランを呈する。墓壙底の規模は全長1.98m、最大幅0.94mとなり、深さは0.36mとなる。その形状から埋葬施設として木棺が伴っていた可能性が高い。墓壙検出面付近では黒色土と黄褐色土が混ざった形で堆積しており、墓壙全体をパックする封土があったことが推測できる。墓壙上部には標石が検出されており、墳丘頂部平坦面にむかって傾斜を持つことから墳丘斜面の盛土上に貼られたものと判断した。

第６号墓（第８図）　第６号墓は墳丘頂部平坦面南東隅で検出した。検出面は墳丘構築以前の基盤層からであり、墳丘盛土が施される以前に埋葬が完了している。墳丘主軸に対し概ね平行して墓壙が掘り込まれている。墓壙上面の検出規模は全長1.54m、最大幅0.96mとなり、長方形のプランを呈する。墓壙底の規模は全長1.26m、最大幅0.76mとなり、深さは0.25mとなる。南側の小口に張り出し部が認められたが、性格は不明である。墓壙内部には黒色土が堆積していることが認められたが、木棺などの埋葬施設の痕跡は不明瞭であった。墓壙東側上層において礫群が検出されたが、墓壙上面レベルから20～35㎝離れており、墳丘盛土完了後に施された標石と考えられる。

第８号墓　第８号墓は第６号墳墓北側の墳丘頂部平坦面から墳丘東側斜面にかけて検出した。墓壙直上から検出された礫群は周辺の貼石と比較すると沈みが確認できることから内部

の埋葬施設などの腐朽による落ち込みであるものと考えられる[9]。このことから墓壙であると判断した。詳細な調査を実施しておらず不明瞭ではあるものの、全長0.88m、最大幅0.28mとなり、隅丸長方形のプランを呈する。その規模から小児埋葬の可能性が推測できる。



第８図　第６号墓平面図・断面図

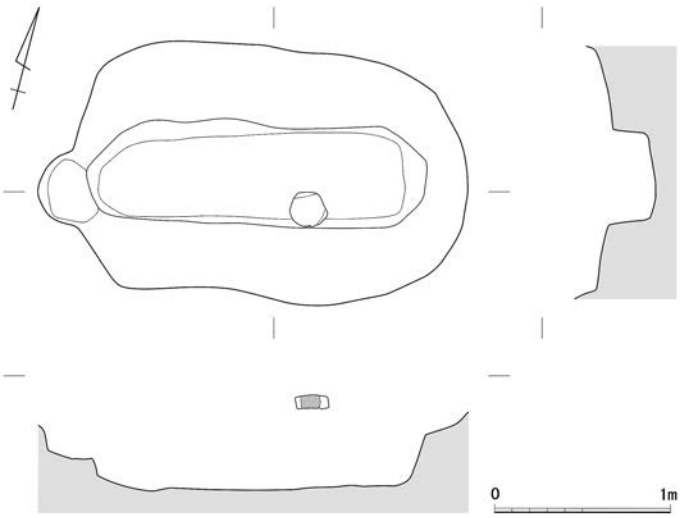
周　溝　墳丘東側に位置し、第１号墳の周溝に約１m離れて隣接している（第３・４図）。墳丘東側中央付近から南側へ続く周溝であり、断面はU字形を呈する。検出長は2.72m、深さ0.25mである。北西側で収束し、最大幅は1.40mとなる。詳細な調査を実施する前に破壊されたため不明瞭ではあるが、第１号墳の周溝と共有されないことから、方形貼石墓に付随する周溝であると判断した。また、南方向への検出は実施しておらず、墳丘墓南東側の第３号墳周溝との関係は不明である[10]。なお、周溝埋土から墳丘墓貼石の崩落礫がみられないことから、墳丘墓の構築が終了し、第１号墳などの周辺の古墳が築造される以前に埋没していたと推測される。

外表施設　墳丘墓に属する外表施設としては列石・貼石及び標石を検出した。これらの外表施設の形態は当該時期の墳丘墓の中でも特徴的であり、方形貼石墓の初源的なあり方を示す可能性が高い。

標　石（第４～８図）　墳丘墓に属する墓壙はすべてその上部に標石を伴っており、特に第６号墓では被葬者の埋葬、墳丘構築が完了した後に標石が施されている状況が推測できる。第２号墓・第４号墓・第５号墓・第８号墓については、基本的には第６号墓同様に被葬者の埋葬、墳丘構築が完了した後に施されているものの、墳丘斜面部に位置することから、墳丘頂部平坦面に向かって概ね20°から45°程度で傾斜している。これは、方形貼石墓の斜面に施される貼石として把握できる形態を呈しており、使用される礫についても墳丘墓東側斜面で検出された貼石と同様であり、一様に標石と貼石で区別できない。ただし、墳丘東側斜面で見られるような墳丘裾部の列石が認めらないことから、標石として施されたものと判断した。なお、墳丘東側斜面で検出した貼石は墳丘斜面全体に施されているが、その他の斜面では墓壙上部のみで礫群が検出されており、標石を貼石状に施すことで、貼石の代用としていたとも推測できる。

列石・貼石（第４図）　墳丘墓東側斜面で検出された。検出範囲は全長約6.7m、幅約1.1mであり、残存状況が悪いものの、列石１列と３段の貼石が確認された。貼石に使用された礫については墳丘墓南東側の第３号古墳周溝からも確認されており、墳丘墓に伴う貼石が崩落したものと推測できる。貼石の角度は概ね20°から40°であり、各墓壙に伴う標石と比較して石材は同一であるものの、使用される礫の大きさに規格性が明瞭には認められない。墳丘隅角部分についても残存状況が悪く、その形態は不明瞭であるため、むしろ四隅突出型墳丘墓で

ある可能性も否定できない。貼石のあり方については、仁木聡氏の分類（仁木 2007）では、Ⅱ類A－１となると判断できるが、規格性が低い。Ⅰ類である中期中葉の島根県江津市波来浜遺跡A区墳丘墓群の貼石のあり方にも類似し、列石・貼石の初源的なあり方を示す可能性が高い[11]。また、墳丘斜面から崩落した貼石は墳丘墓南東に位置する第３号墳周溝から検出されているが、そのほかからはほとんど検出されておらず、墳丘墓完成時の列石・貼石が墳丘墓東側斜面にのみ施されていたと考えられる。なお、貼石検出範囲から弥生土器片が出土している。



第９図　第１号墓平面図・断面図

（２）その他の遺構

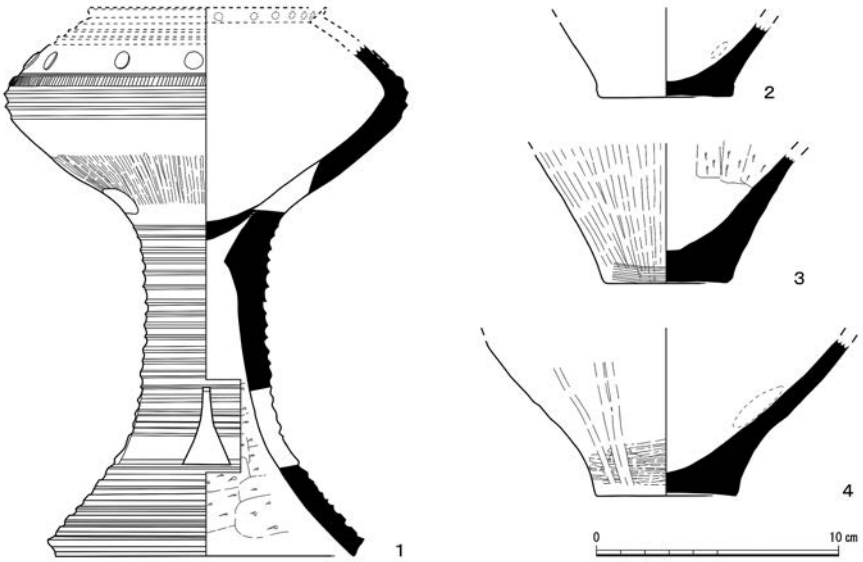
第１号墓（第９図）　第１号墓は墳丘北側平坦面で検出した。検出面は墳丘墓同様に基盤層からであるものの、近隣の四拾貫古墳群で検出した弥生時代後期から古墳時代の墓壙と形態的に類似することから墳丘墓構築以降の新しい墓壙であると判断した。墓壙上面の検出規模は全長2.40m、最大幅1.42mとなり、長楕円形に近い二段土壙墓である。墓壙底の規模は全長1.72m、最大幅0.98mとなり、深さは0.42mとなる。墓壙内部には黒ボク土と赤褐色粘土が堆積しており、底面の形状から木棺墓であることが推測できるが、痕跡等は確認できていない。

第３号墓　第３号墓は墳丘北側平坦面で検出した。墓壙上面の検出規模は全長0.94m、最大幅0.8mとなり、長方形に近いプランを呈する。周辺墓壙同様に基盤層である赤褐色粘土層からの掘り込みであるため、不明瞭ではあるが墓壙として報告する。

６．出土遺物（第10図）

方形貼石墓に関連して出土した遺物は多くはない。墳丘墓斜面から出土した弥生土器底部片、胴部片のほか、墳丘墓南東部で確認された第３号墳周溝から出土した脚台付鉢形土器がみられた。出土した土器片は５個体分であり、このうち４点を図化した。

１は脚台付鉢形土器で、方形貼石墓南東に位置する第３号墳周溝から出土した。脚部及び鉢部の底部から胴部にかけて比較的良好な状態で遺存する。鉢底部に穿孔が１ヶ所認められる。口縁部は出土しておらず不明であるが、器高22.7㎝、口縁部径10.0㎝程度になると推測できる。胴部はやや丸みを持つ算盤玉形を呈し、胴部最大径は16.8㎝である。肩部には２個一対の円形浮文を貼付け、胴部最大径部分には凹線文が４条施され、１条目と２条目の間には刻目文が施される。鉢部外面は風化が著しいが、底部部分で縦方向のヘラミガキが施される。内面は風化が著しく調整は不明である。脚部は下方に向かって緩やかな弧を描きながら



第10図　四拾貫小原墳丘墓出土土器

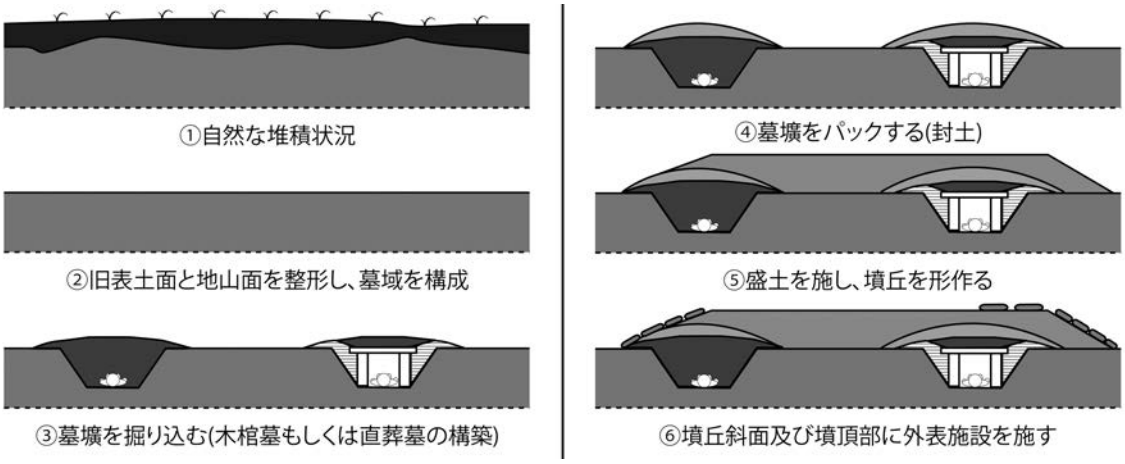
開き、脚端部が外方にやや拡張する。三角形のすかしが４ヶ所認められる。脚部は凹線文を多用し、すかし付近の間帯を除き全面に施される。脚部下端端面にも１条の凹線文が施される。内面にはすかしより下方で横方向のヘラケズリが施され、端部はナデで仕上げられる。脚径は13.2㎝である。灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5㎜～2.0㎜の石英・長石を含むが緻密なものである。

２～４は底部で、方形貼石墓東側斜面から出土した。底面がヘラナデされることで若干上げ底となっている。灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5㎜～2.0㎜の石英・長石を含むが緻密なものである。２は底径5.7㎝である。内外面ともに風化が著しいため調整は不明であるが、外面底部短部はナデ、内面は指頭圧痕が認められる。３は底径5.4㎝である。外面に縦方向のヘラミガキを施したのちに、底部端部に横方向のハケが施され、内面は縦方向のヘラケズリが施される。４は底径5.9㎝である。外面は横方向のヘラミガキの後、縦方向のヘラミガキが施される。内面の調整は風化のため不明であるが、指頭圧痕が認められる。

これらの方形貼石墓に伴う出土土器の時期については、脚台付鉢形土器の凹線文の多条化、刻目文といった形態的特徴から弥生時代中期後葉の塩町式土器に比定される。しかし、塩町式土器の指標である刻目文の重層化（重層刻目文（伊藤 2005））が認められないことについては若干の留意が必要である。ただし、脚台付鉢形土器は注口の有無に関わりなく、備後北部の塩町式土器分布圏に目立って出土する器種であることを踏まえ、弥生時代中期後葉の位置付けが妥当であると考える。

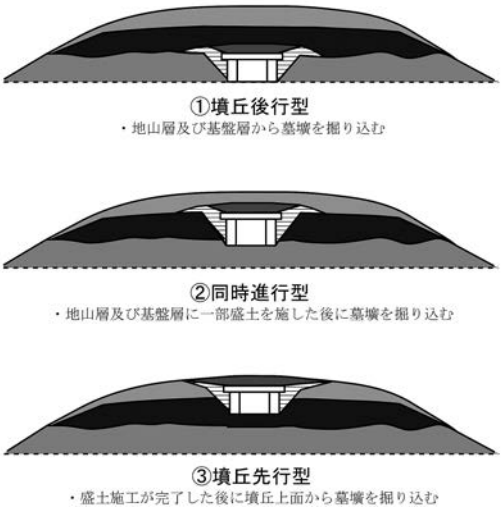
７．考　察

四拾貫小原墳丘墓は弥生時代中期後葉の方形貼石墓の一種であると想定した。墳丘の復元長が約8.5m、復元幅約5.7m、墳丘高は0.3mの低墳丘墓であったとみられる。四拾貫小原墳丘墓の周辺には古墳が築造されるほか、区画溝を伴う遺構が検出されており、本墳丘墓以外



第11図　墳丘墓構築過程の復元

にも弥生時代の墳墓が築造されていた可能性も推測できる。以下、本墳丘墓の諸要素について若干の検討を行いたい。

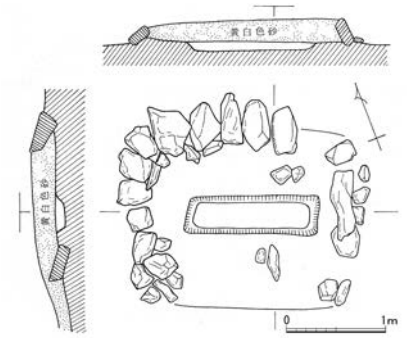


第12図　墓壙構築方法の分類

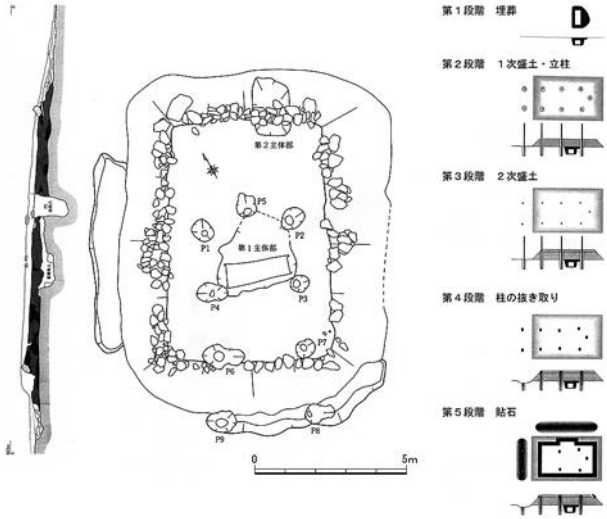
（１）墳丘構築と埋葬過程の復元

四拾貫小原墳丘墓墳丘の構築方法を復元する（第11図）。墳丘墓を構築するにあたり、墳丘墓周辺も含めて旧表土面を除去し、赤褐色粘土層（地山面）を整形することで墓域（埋葬作業面）を造りだしたと考えられる。この埋葬作業面については、墳丘墓構築完了以降に掘り込まれた第１号墓も同一面で検出されており、一定期間墓域として機能していたものと推測できる。埋葬作業面形成後、墳丘墓に伴う墓壙（第２・４～６・８号墓）を掘り込み、木棺もしくは直葬で被葬者を埋葬する。各墓壙の上部に墓壙を覆う封土を施し、被葬者の埋葬を終えることも推定される。すべての埋葬が終了した後に、埋葬作業面を墳丘墓基礎面とし、盛土を施す。このため、各埋葬行為に関しての先後関係については不明である[12]。墳丘を構築した後に、墳丘斜面の列石・貼石及び墓壙上部の標石を盛土層上面に貼り、墳丘構築のすべての工程を終了している。なお、墳丘墓南東で検出した周溝については詳細な調査はなされておらず不明瞭ではあるが、墳丘盛土終了後に掘り込んだものと推測している。

以上のように、四拾貫小原墳丘墓は墳丘構築以前に埋葬が行われていたことが想定できる。つまり、墓壙掘削および埋葬の段階が墳丘構築前となる「墳丘後行型」（和田 2003）であることとなる。筆者は以前、弥生時代中期の墳丘墓（一部後期初頭まで存続幅を持つ墳墓含む）の墓壙構築方法を検討した際、墳丘構築前あるいは墳丘構築中に墓壙が掘り込まれ（「墳丘後行型」・「同時進行型」）、後期初頭以降、墳丘を構築した後に墓壙が掘り込まれる「墳丘先行型」へ変化することを指摘した（今福 2012）（第12図）。本墳丘墓においては、「墳丘後行型」



第13図　波来浜遺跡Ａ区４号墓



第14図　梅田萱峯墳丘墓

の墓壙構築方法を採用しているが、中国地方で「墳丘後行型」の墓壙構築方法を採用している可能性がある墳丘墓については、島根県江津市波来浜遺跡A区検出の墳丘墓群[13]（第13図）、鳥取県東伯郡琴浦町梅田萱峯墳丘墓（第14図）などがある。本墳丘墓同様に初源的な形態をもつ方形貼石墓であることがわかる。

なお、墳丘の長幅比は約1.5であり、同時期の三次市陣山２号墓（落田 1996）の墳丘長幅比が約2.1、後期初頭の庄原市佐田谷１号墓（妹尾 1987）の長幅比が約1.5、中期末葉から後期初頭の佐田峠３号墓（野島 2016）が約2.2であり、四拾貫小原墳丘墓は後期初頭の長幅比と類似するが、同時期の墳丘墓である陣山２号墓および佐田峠３号墓は「同時進行型」による墓壙構築方法を採用する墳丘墓であるため、同時期の墳丘墓とは墓壙構築方法や墳丘の長幅比が異なる可能性がある。

（２）墓壙規模とその配置

四拾貫小原墳丘墓に伴う埋葬施設は５基（第２・４～６・８号墓）で、最大規模は第４号墓の全長2.52m・幅1.25mである。当該時期としては大型の部類ではあるが、突出した規模を持つとは言えない。また、第５号墓も全長2.32m・幅1.65mと同程度の規模であり、中心的な埋葬が明瞭ではないことが指摘できる。この点については、埋葬配置からも想定できる。墳丘頂部平坦面中央付近に埋葬施設が配置されない特異な様相を呈しており、墳丘縁辺部に沿う形となっている。同時期の墳丘墓の埋葬配置の多くは墳丘長軸に直交して埋葬施設を複数基並列に配置する「並列型」であり、「同時進行型」の墓壙構築方法と相関性を持つ。これに対し、四拾貫小原墳丘墓は先述したように「墳丘後行型」で墓壙・墳丘を構築するものであり、埋葬は墳丘構築以前に終了している。このことから、埋葬配置と墓壙構築方法は相関性を持つとは言いがたく、むしろ墳丘縁辺部に埋葬施設を配置し、墳丘頂部平坦面中央付近に埋葬施設が配置されないという様相が当該時期・当該集団の社会のあり方を示しているものとも考えられる。なお、弥生前期以降の墓制から検討すると、日本海沿岸部で認められる列状配置と同様に、墳丘墓中央部を囲繞する埋葬配置は列状墓以来の強い共同体的規制を

反映したものであるとも理解できる。また、墓壙上面に標石が伴うことも、弥生前期に日本海沿岸部、特に島根県域に流入した墓制の系譜を示している。このことからも、列状配置に系譜を持つ埋葬論理が江の川上流域に波及していたことが想定できる（守岡 2007・山田 2000）。いずれにせよ、被葬者間の社会的地位の著しい隔たりがあったことは想定できず、列状墓に認められるような強い規制が想定できることから、共同体的集団内の分節の表示といった状況を表すものと考えたい[14]。

（３）外表施設とその形態的特長

四拾貫小原墳丘墓では外表施設として墳丘斜面の列石・貼石及び墓壙上部の標石を確認した。列石・貼石は墳丘東側斜面で検出したが、遺存状況が悪く、崩落した礫が墳丘墓南東に位置する第３号墳周溝内に堆積している状況が認められる。列石１列と３段の貼石が確認され、仁木氏の分類のⅡ類 A-1に比定できる。また、貼石の検出状況から、墳丘斜面全体に貼石が施されていたとは言い難く、石材の大きさや、貼り方に関する規格性も明瞭ではない。なお、墓壙上部で検出された墳丘頂部平坦面に向かって傾斜を持つ標石については、使用される石材は同一であるものの、比較して大型の礫を使用していること、貼石が東側斜面から南東隅角に向けての部分的なものであった可能性から、貼石とは区別した。以下、標石について考察を行いたい。

標石は墳丘墓に伴う墓壙すべての上部で検出された。標石は墓壙上面に施された墳丘盛土に貼られており、第６号墓では墓壙と標石の検出高の差異から墳丘盛土高の復元が可能である。墳丘東側斜面に施された貼石と比較して大型の礫を使用しており、丁寧に貼られている印象を受ける。墳丘斜面に位置する墓壙上部で検出された標石は、墳丘頂部平坦面に向かって傾斜を持っていることから墳丘盛土後に施されており、貼石と同時に施されたと推測される。これらの墳丘斜面の標石は、墳丘墓斜面に施される貼石と傾斜角度等が類似しており、貼石として墳丘斜面に施されたとも理解できる。しかしながら、東側斜面で確認された列石が墓壙上部の標石では認められず、標石が墓壙上面付近に限定されること、第２号墓墓壙外部に位置する標石は角度を持たず水平に貼られている点から墓壙上部の標石として意識されていたと考えられる。ただし、墓壙上部の標石が貼石としての機能を有していることも指摘でき、定型的な方形貼石墓で認められる貼石の祖形的な形態を有した標石であると判断できる。

以上のように、四拾貫小原墳丘墓の外表施設は、列石・貼石と貼石状の標石を持つことがわかる。列石・貼石については後出する三次市陣山墳墓群や庄原市佐田谷・佐田峠墳墓群のような四隅突出型墳丘墓に見られる配石構造とは異なり、やはり規格性が低いものと言える。このような配石構造のあり方は、前述した列状配置の埋葬施設とともに考えれば、強い共同体的規制のなかで「配置」された被葬者を想起するために施された配石であり、弥生時代前期に認められる標石墓・覆石墓から発展したものと解釈できる。つまり、本墳丘墓斜面上に位置する墓壙上面に施された標石は、墳丘斜面上に配置されたことから貼石墓の貼石の祖形として位置づけられ、当該地域で弥生時代中期後葉から後期初頭頃に隆盛する方形貼石墓および四隅突出型墳丘墓の列石・貼石の初源的な形態と考えられる[15]。

８．おわりに

四拾貫小原墳丘墓は弥生時代中期後葉の方形貼石墓の一種であると想定した。埋葬施設は５基検出され、墓壙規模・埋葬配置からみると、中心的な埋葬は未だ不明瞭であり、埋葬者間の社会的地位には著しい隔たりを持たないと想定できることから、共同体内集団の分節を示すものであるという当該地域集団の社会的あり方を想像することができた。

墳丘構築方法の復元ができたことにより、墳丘構築以前に埋葬が終了する「墳丘後行型」の墓壙構築方法を採用していたことも明らかとなったと言ってよい。外表施設についても、列石・貼石と標石が施されている状況が把握できた。列石・貼石は列石１列と貼石３段で構成されているものの、中期後葉以降の方形貼石墓と比較して規格性が低いことが窺える。標石についても、盛土施工後に施され、墳丘斜面部で検出された墓壙上部の標石は貼石と同程度の傾斜角度を持っており、貼石の性格を併せ持つ形態であることが確認できた。これらの確認された墳丘墓の諸要素から、四拾貫小原墳丘墓は列状配置の埋葬施設をもつ墳丘墓同様に、埋葬施設を強調するために配石構造が施された、方形貼石墓の初源的な様相を示すものである可能性が高い。また、墓壙構築方法については、後期初頭に墳丘完成以前に墓壙が掘り込まれるタイプ（「墳丘後行型」および「同時進行型」）から、墳丘完成後に墓壙が掘り込まれる「墳丘先行型」へと変化することが想定できてはいたが、四拾貫小原墳丘墓が方形貼石墓の初源的な形態を持つことから、方形貼石墓に限ってみても墳丘構築以前に埋葬が終了する「墳丘後行型」から墳丘の構築と同時に埋葬が実施される「同時進行型」への墓壙構築方法の変化を想定できるようになった。さらに、配石構造のあり方から、方形貼石墓の系譜が弥生時代前半期の標石墓・覆石墓にまで遡る可能性も考えられるが、墳丘盛土が墓域に施される要因や他地域の墳丘墓形成過程との比較などについても詳細に検討していく必要があろう。

以上、四拾貫小原墳遺跡の調査成果に関わる新たな評価からみて、四拾貫小原墳丘墓は中国地方における弥生墳丘墓の発達過程を知ることができる、きわめて重要な墳墓群であるといえる。

今回の報告は広島大学大学院文学研究科考古学研究室在室中に実施した資料確認、遺物実測をもとにして、平成28年度広島史学研究会（H28.10.31）で発表した内容に加筆修正したものとなっている。資料確認については野島先生にご協力いただき、報告という形をとることを快諾していただいた。なお、本研究報告は『四隅突出型墳丘墓の発達に関する考古学的研究』と題する科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号23520922〈研究代表者：野島　永〉）による調査研究成果の一部である。

最後になったが、本稿を作成するにあたって、多大なご指導・ご協力をいただいた。広島史学研究会での発表時には妹尾周三氏・村田晋氏から助言をいただいた。野島先生には考古学研究室退室後、本稿が完成するまで時間を費やしてしまいご迷惑をおかけした。また、拙稿に対して多くの助言をいただいた。この場を借りて、御礼を申し上げたい。

註

(1) 四拾貫小原調査団は松崎寿和調査団長をはじめ、市岡軍二氏、鵜殿治雄氏、金井亀喜氏、川越哲志氏、河瀬正利氏、潮見浩氏、滝谷章氏、服部宜昭氏、福井万千氏、藤村耕市氏、三浦亮氏で編成された。このほか、地元からも多くの協力を得たようである。

(2) 四拾貫小原遺跡の資料としては、1968年実施の調査以前に1967年にも発掘調査が実施されており、広島大学考古学研究室に資料が保管されている。残念ながら両調査ともに資料が散逸しており、遺構の検出レベルなど不明な点がある。

(3) 検出された遺構の内、方形区画溝及びこれに伴う土坑については弥生墳墓の可能性が高く、四拾貫小原墳丘墓同様に墳丘墓であったと考えられる。

(4) 1969年で報告された弥生墳墓第７号墓は周溝であり、本報告では第７号墳墓を欠番としている。また、新たに確認した墓壙については1969年報告からの通し番号とした。

(5) 1967年の調査時に確認された弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓は墳丘を伴っていたことが確認できている。弥生時代後期に四拾貫小原遺跡では方形貼石墓から台状墓へと墳丘形態が変化するようである。

(6) 埋葬施設に伴う標石は墓壙直上からは検出されず、墓壙直上に堆積する黒ボク土上面から確認された。調査当時において、標石等の配石構造については墳丘墓完成時に露出していたものであると認識されており、この黒ボク土が墳丘盛土であると判断した。

(7) 各埋葬施設の主軸については、調査図面（原図）から特定したが、遺構全体の配置を記録した資料が1/500の縮尺のみであった。そのため、整合性に疑問が生じており、四隅突出型墳丘墓であるか判断できなかった。

(8) 墓壙上面の封土であり、埋葬終了後に各埋葬を強調するため、標石と合わせて土饅頭が施されたものと認識している。この土饅頭状の封土が墳丘盛土を構成する要素の一つとなっていると考える。

(9) 実測図面及び記録写真から第６号墓北側検出遺構を墓壙とした。

(10) 四拾貫小原遺跡内で確認された区画溝とこれに伴う土壙は墳丘墓の可能性が想定でき、周溝が連結していることも考えられる。

(11) 残存状況が悪いが、礫の大きさに明瞭なまとまりが認められない。貼り方についても、規則性がそれほど確認できない。周辺の当該時期事例と比較すれば、陣山墳墓群（落田正弘 1996）のように明瞭な隅角、稜線の意識的な貼り方や整然とした貼石の段構成を呈する貼石ではなく、波来浜遺跡A区墳丘墓（門脇 1973）で認められるような貼石のあり方に類似している。池淵氏が指摘するような、列状配置された集団の分節を強調するために前代的な標石から発展した貼石（池淵 2007）に近いものと考える。

(12) 各埋葬行為に関して、その前後関係は不明であるが、墳丘構築後の標石・貼石が墓壙上部に伴うことから、埋葬から墳丘盛土までの行為がそれ程時期を隔てることなく行われていたと考えることができる。

(13) 波来浜遺跡A区は斜面地に立地し、単独埋葬を主体とした墳丘墓群で構成されている。そのため、地表面に部分的な盛土を施し平坦面を形成し、埋葬作業面を構築したことが想定される。このことから、「同時進行型」による墓壙構築方法を採用しているとも捉えられる。しかしながら、同時期の「同時進行型」による墓壙構築方法を採用する墳丘墓は多数埋葬を基本とし、各墓壙上部の封土の連続が盛土となっている。これらのことから、波来浜遺跡A区単独埋葬の墳丘墓は、墳丘墓構築以前の埋葬作業面を形成するための盛土であることから「墳丘後行型」の墓壙構築方法を採用する墳丘墓であると指摘できる。なお、A区２号墓においては、墳丘盛土堆積状況から「同時進行型」による墓壙構築方法を採用している。ただし、追葬ごとに、新たに貼石を施し、盛土と貼石によって各埋葬を連結させることで、同一の埋葬空間として認識できる状況である。「墳丘後行型」から「同時進行型」へ墓壙構築方法が移行する過度期の様相を示すものと位置付けたい。

(14) 池淵俊一氏は、当該時期の方形区画墓は列状墓以来の埋葬論理を踏襲しつつ、集団内の個人埋葬及びサブクラン的分節を表示しているとし、一定の条件下に選抜された代表者層を表示するものではないと指摘している（池淵 2007)。筆者も同様に、中期後半の埋葬配置、墓壙規模から共同体内の特定の集団を埋葬するための墓として区画墓が採用されるものの、この特定の集団と他者には明瞭な階層差はないと考えている。

(15) 日本海沿岸地域における方形区画墓の貼石については、池淵氏が波来浜遺跡A区墳丘墓において、個々の埋葬施設の大きさに合わせて四周に石をめぐらせたものと把握しており、前段階の標石の一種である墓壙の四周を縁取る配石がやや規模を拡大して成立したものと指摘している（池淵 2007)。江の川上・下流域では、標石から貼石への発達が想定できる状況である。

引用・参考文献

池淵俊一　2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。

伊藤　実　1992 「備後地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社、155～238頁。

伊藤　実　2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器 －四隅突出の思想とその背景－」『考古論集 －川越哲志先生退官記念論文集－』川越哲志先生退官記念事業会、375～398頁。

今福拓哉　2012 「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学考古学研究室紀要』第４号、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、83～100頁。

岩永省三　2010 「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』第８号、17～42頁。

会下和宏　2002 「弥生墳墓の墓壙規模について －西日本～関東地域の木棺・木槨墓等を中心に－」『島根考古学会誌』第19集、33～63頁。

会下和宏　2003 「西日本における弥生墳墓副葬品の様相とその背景」『島根考古学会誌』第17集、49～72頁。

落田正弘　1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。

尾本原勇人　2000 『宗祐池西遺跡』三次市教育委員会。

門脇利彦　1973 『波来浜遺跡発掘調査報告書』島根県江津市。

潮見　浩編　1969 『四拾貫小原遺跡』四拾貫小原発掘調査団、8～15頁。

妹尾周三編　1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター。

高倉洋彰　1973 「墳墓からみた弥生社会の発展過程」『考古学研究』20-2、7～24頁。

田中義昭　1992 『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室。

仁木　聡　2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、21～31頁。

野島　永　1991 「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集』第２集、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、31～38頁。

野島　永　2015 「広島県北部における弥生墳丘墓の成立と展開 －佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査を通して－」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第７号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～12頁。

野島　永編　2016 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』、広島大学大学院文学研究科考古学研究室・庄原市教育委員会。

広島県教育委員会　『広島県遺跡地図』（電子版：http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/bunkazai-map-

map.html)。
広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会　1974 『広島県双三郡三次市史料総覧』第５篇、広島県双三郡三次市史料総覧刊行会。
広島県教育委員会　1996 『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第４集。
福永伸哉　1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第１号、81～106頁。
藤田憲司　2010 『山陰弥生墳丘墓の研究』日本出版ネットワーク。
牧本哲雄・湯村　功・小山浩和・濵本利幸・野口良也・前田昌宏・原田克美　2009『梅田萱峯遺跡』Ⅴ、鳥取県埋蔵文化財センター。
松本岩雄　2003「出雲の四隅突出型墓」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、157～180頁。
溝口孝司　1999 「弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格 －浦江遺跡第５次調査区画墓の意義を中心に－」『九州と東アジアの考古学 －九州大学考古学研究室50周年記念論文集－』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会、157～178頁。
溝口孝司　2000 「墓地と埋葬行為の変遷」『古墳時代像を見なおす』青木書店、201～273頁。
三次市史編纂委員会　2004 『三次市史』Ⅰ（通史）。
三次市史編纂委員会　2004 『三次市史』Ⅱ（史料）。
向田裕治　1978 「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)、広島県教育委員会、187～215頁。
守岡利栄　2007 「山陰における弥生時代前期から中期の墓地遺跡の展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、13～20頁。
山田康弘　2000 「山陰地方における列状配置墓域の展開」『島根考古学会誌』第17集、15～38頁。
脇山佳奈・今福拓哉・小森由佳利・野島　永　2012 「佐田峠墳墓群（第５次）の調査」『広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』ＸＸⅥ、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、21～37頁。
渡辺貞幸　2003 「四隅突出型墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学 －大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。
渡辺貞幸　2007 「まとめにかえて －四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。
和田晴吾　2003 「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究 －葬制の比較研究－』平成11年度～平成13年度　科学研究費補助金（基盤研究（B)(1)）研究成果報告書　課題番号11410108、３～29頁。

挿図出典

第１図 『広島県遺跡地図』(電子版）より筆者作成。第２・４～11・12図　筆者作成。第３・13・14図　各報告書より。

A Re-investigation of the Excavation of the Shijikkan-kohara Yayoi Period Burial Mound and a Discussion of Burial Mound Formation during the Middle Yayoi Period

Takuya IMAFUKU

According to the 1969 investigation report regarding the "Shijikkan-kohara" which was excavated a year earlier, it comprised a series of pit graves (*dokō bo*) from the Yayoi period. However, a more recent reinvestigation of this site suggests instead that a rectangular-shaped grave with multi-row stone pavement on the slope of the burial mound (*hōkei hariishi bo*) is the case here. Therefore, "Shijikkan-kohara" has been re-defined as a Yayoi period grave with burial mound (*yayoi funkyū bo*).

It was constructed in the last third of the Middle Yayoi period and contained five burial facilities. These facilities, including some for children, were built prior to the construction of the burial mound. According to this fact, it was built using the so-called "mound last" method, where the burial mound construction is carried out at the end, after the burial facility is dug out respectively erected (*funkyū kōkōgata*; "mound last" construction type).

The ways through which one constructed the mound and the stone pavement and arranged the burials, were also investigated. Similarly, the Narahama Yayoi period burial mound group and the Umeda-kayamine burial mound in the Chūgoku region were both constructed using the "mound last" method. As both of them were built during the Middle Yayoi Period, one could shed light on the development of the construction method concerning the relationship between the burial facilities and the mound. It changed from the "mound last" type to "concurrent progression" type (here, the mound and the burial facilities are simultaneously constructed) to the "mound first" construction type, where the piling up of the burial mound proceeds first. In addition, it concerns the stone pavement at the mound base as well as boundary stones (*hyōseki*) on top of the grave pits such as stone alignments enclosing or paving the grave (*haiseki*) and arrangement of the the burials are indicating an initial type. This can be considered them as an ancestral form of Yayoi burial mounds in the Chūgoku region. Also the possibility can be assumed that this situation developed from burials practices which were already present in the San'in region and the Chūgoku mountainous regions during the first half of the Yayoi period.

Accordingly, the "Shijikkan-kohara" Yayoi period burial mound is an important archaeological site for studying the origin and evolution of such graves with burial mounds during the Middle Yayoi period in the Chūgoku region.

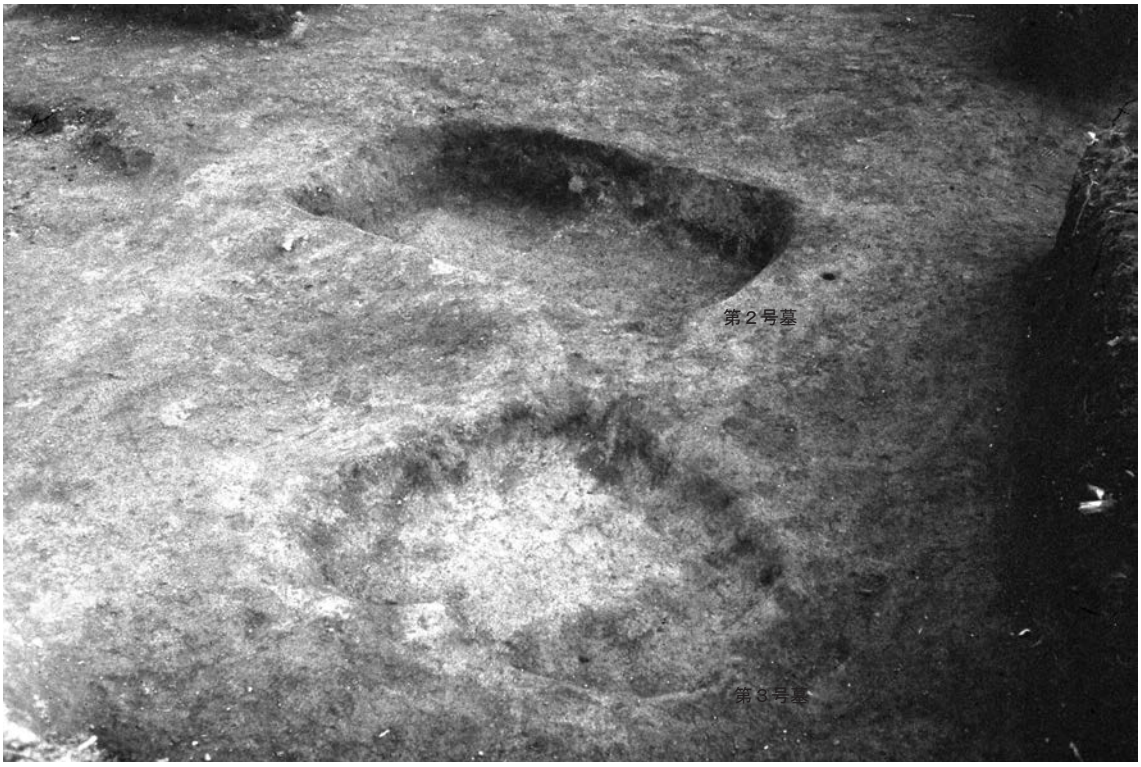
広島県神石高原町出土遺物の資料紹介　　図版第１

（1）四拾貫小原遺跡遠景

（2）四拾貫小原弥生墳丘墓調査後近景（北東から）

図版第２

(1) 第１・２号墓検出状況（北から）



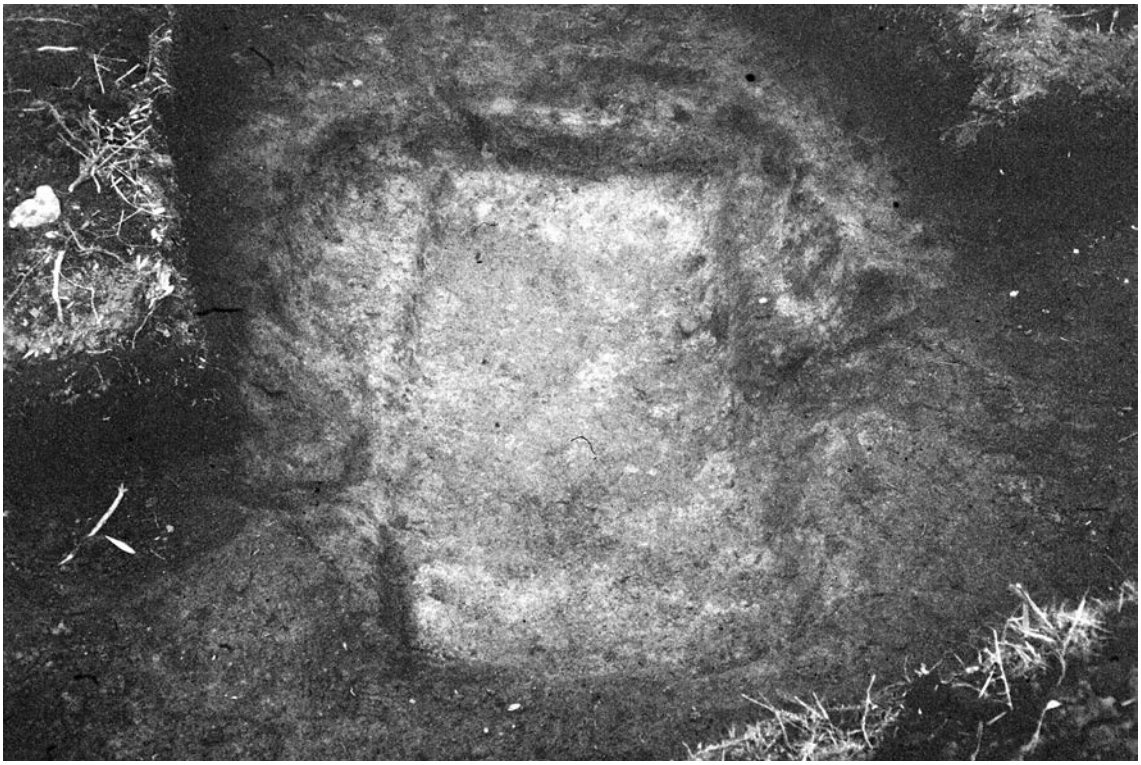
(2) 第２・３号墓完掘状況（北西から）

図版第３

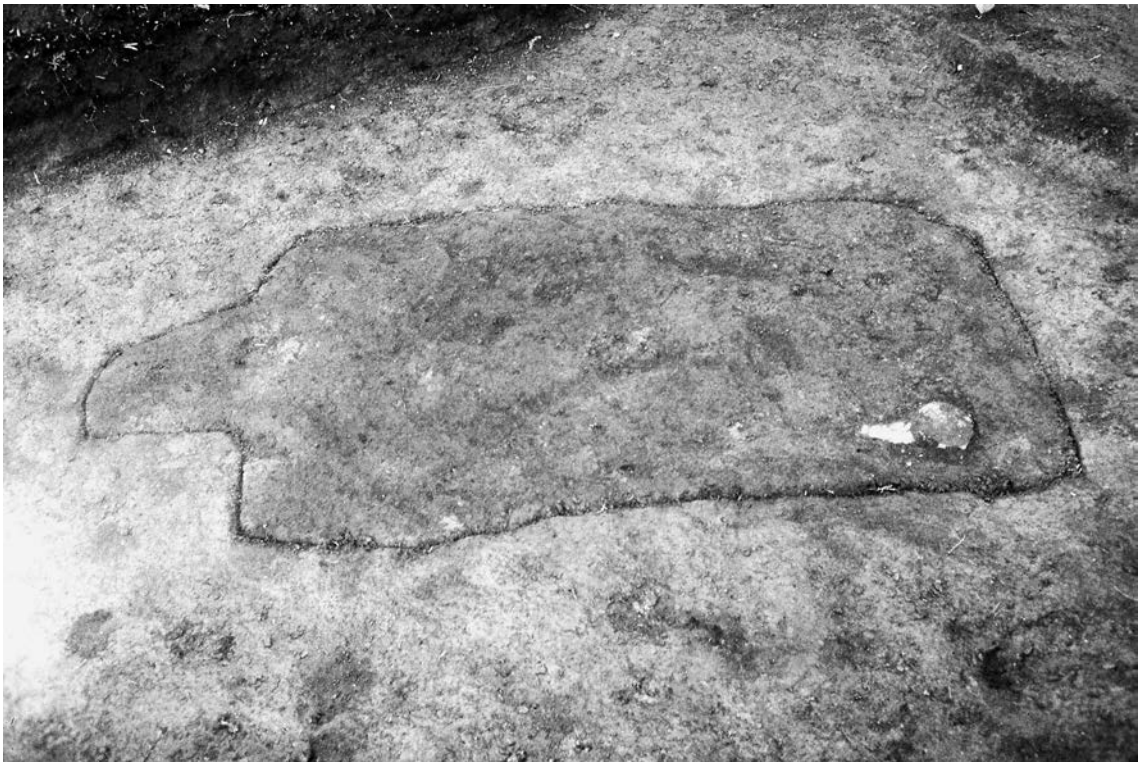
(1) 第４・５号墓検出状況（南東から）

(2) 第４号墓完掘状況（北から）

図版第４

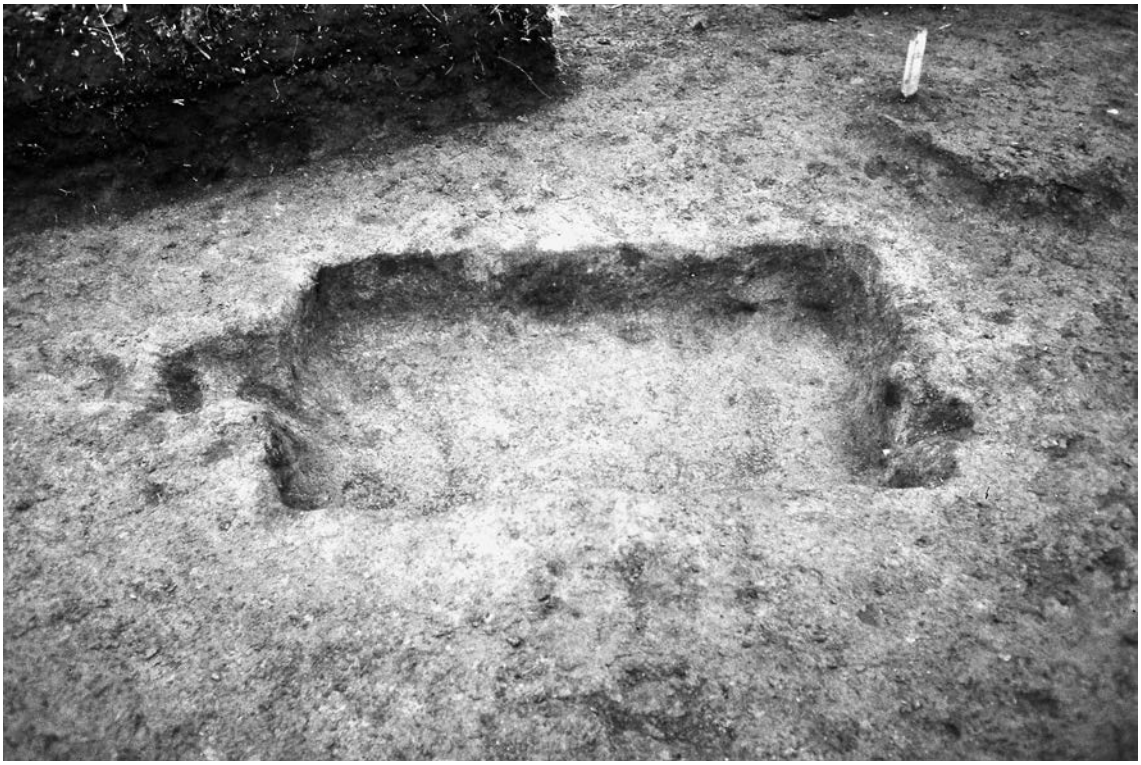


(1) 第５号墓完掘状況（南から）



(2) 第６号墓検出状況（東から）

図版第５



（1）第６号墓完掘状況（東から）

（2）墳丘墓東側周溝検出状況（南東から）

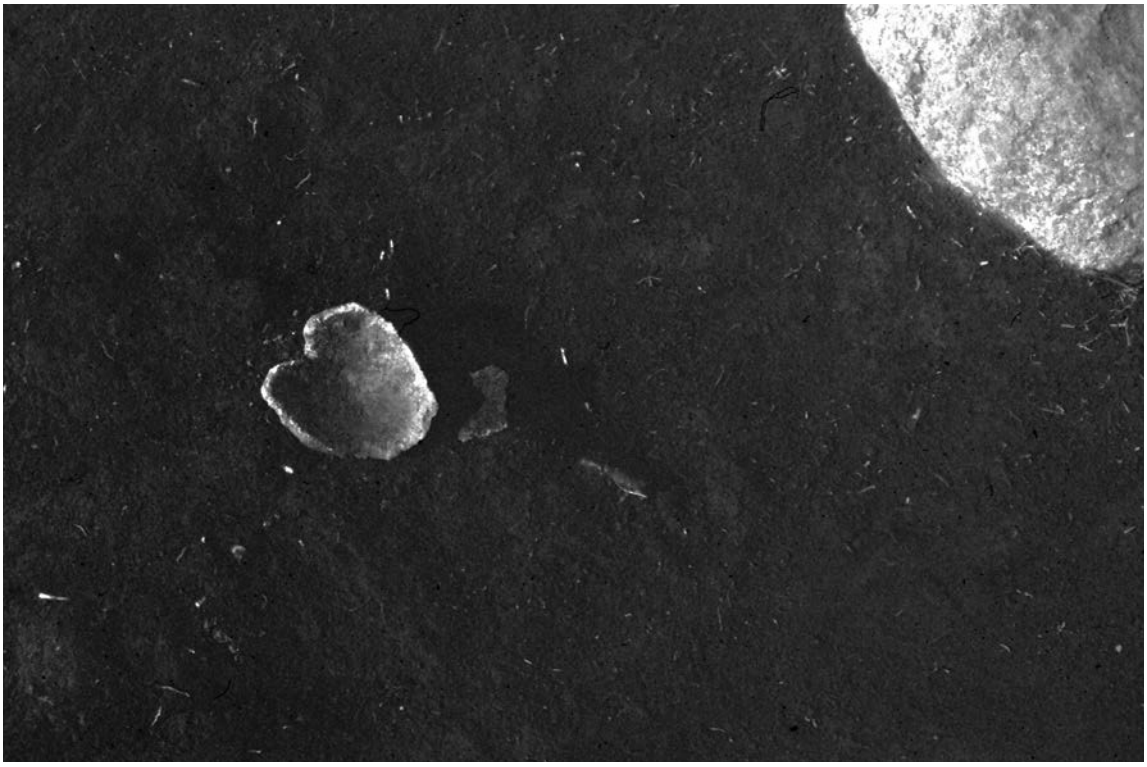
図版第６

（1）墳丘墓東側斜面列石・貼石・標石検出状況（北から）

（2）第３号墳周溝内崩落貼石検出状況

図版第７

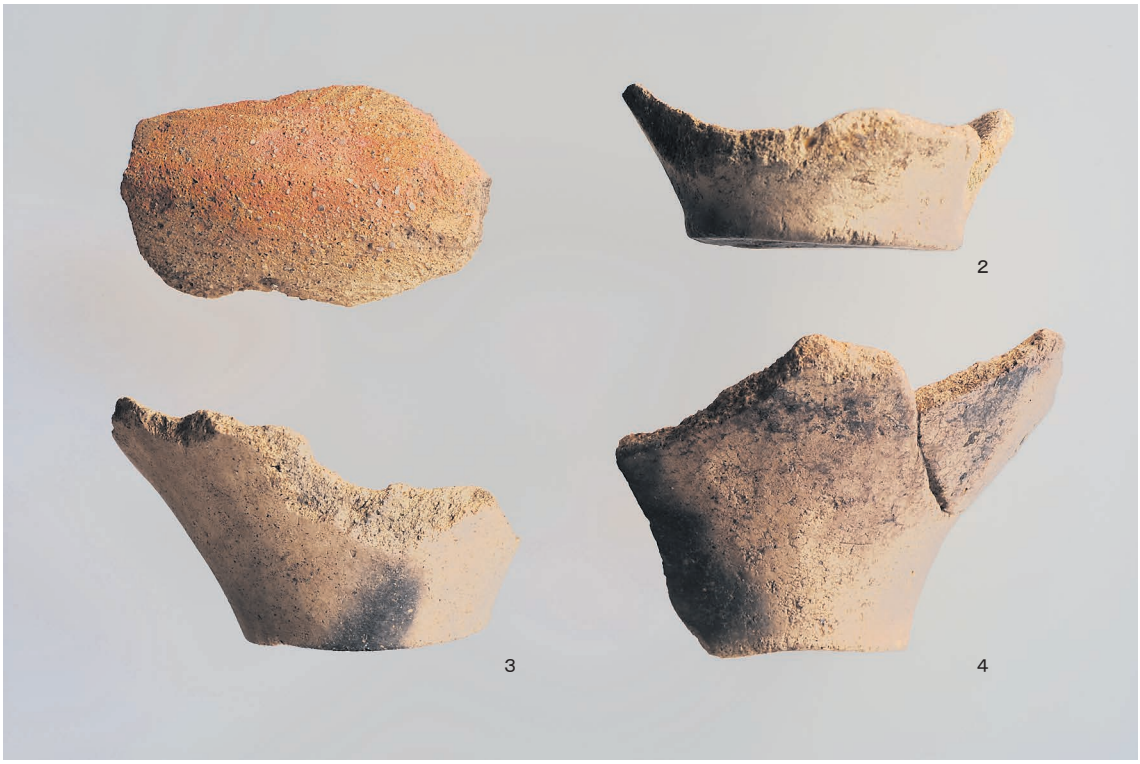
(1) 土器出土状況１（第３号墳周溝内）



(2) 土器出土状況２（墳丘墓東側斜面）

図版第８

（1）脚台付鉢形土器（第３号墳周溝内）



（2）弥生土器片（方形貼石墓東側斜面）